

# 明治期の兵語辞書について (三)

—— ドイツ語を中心にして ——

信 岡 資 生

## 6 獨佛和兵語字叢

### 1

本辞典について記述している文献は極めて少なく、惣郷正明・朝倉治彦編『辞書解題辞典』(東京堂出版 昭和52年)にも立項されていない。筆者が作成した『日独二言語対訳辞書総覧 総目録 2』(成城大学「経済研究」第135号 平成8年12月 所載)では、その「(3) 軍事・交通」の(軍事)の部に303の番号を付けて挙げておいたものである。西堀 昭氏は『明治時代の兵語辞典の考察』の中でこの書を取り上げ、次のように記述している<sup>1)</sup>。

独仏和兵語字叢 203p. 偕行社 刊行年不詳

この字叢が明治中期から後期にかけて刊行されたことは、内容が決め手となるが字叢と云う用語や明治二十九年頃の偕行社の使用活字とが同一であることによっても推定可能であろう。語の配列が独逸語によっているので、仏蘭西語の場合はアルファベットでなく使用に不便である。読み仮名や文法の説明は一切ない。

西堀氏のご好意により、氏所蔵の本書を直接手に取って調べることができた。形式・体裁は18,6cm×12,5cm, 厚さ1,2cm, 目方も180グラム

の軽い本である。糊付け左綴じ、普通紙の本文と同じ大きさでやや厚めというだけの簡素な表紙には三つに仕切られた中央の枠内に「獨佛和兵語字叢」、その左枠の下方に「偕行社藏版」といずれも縦書きされているのみである(図1—A)。この表紙をめくると扉もなく、一枚の白紙を挟んで直ちに本文第1頁となる。本文は203頁までで、204頁目は白紙、次の頁から「誤字録」が26頁分続いて裏表紙となる。序文も奥付もないので、編纂の経緯や编者・刊行年などは一切不明である。第1頁は以下の通りである。

abbrechen		
das Lager ——	lever ( ou rompre ) le camp	撤營スル
die Brucken ——	rompre les pontes	橋梁ヲ破壊スル
das Abbrechen eines Lagers	la levée d'un camp	撤營
in kleinen Abteilungen ——	rompre	小部隊ニ分解スル
zu Vieren ——	rompre par quatre	四分スル
Abbrucken	le repliement d'un pont, l'enlèvement d'un pont	撤橋。橋梁撤去
abfeuern (abschiessen)	tirer	放火スル。發射スル
abkochen	faire la soupe	炊爨スル
abkommandirt zum ……	détaché à ……	…… 附ヲ命セラル
—— von ……	détaché de ……	…… ヨリ分遣セラル
abkommen		
gut ——	bien faire partir le coup	精密ニ射撃スル
zu weit ——	s'attarder, s'éloigner	彈着超過スル
von …… ——	s'ecarter trop de……	躲避スル

以上のように本文各頁は、最上段にアルファベットを記す柱を入れ、縦に3段に仕切って22行、左欄がドイツ語見出し、中央がフランス語、右欄が日本語である(図2)。ドイツ語もフランス語もラテン字体、Bは使



図 1-B

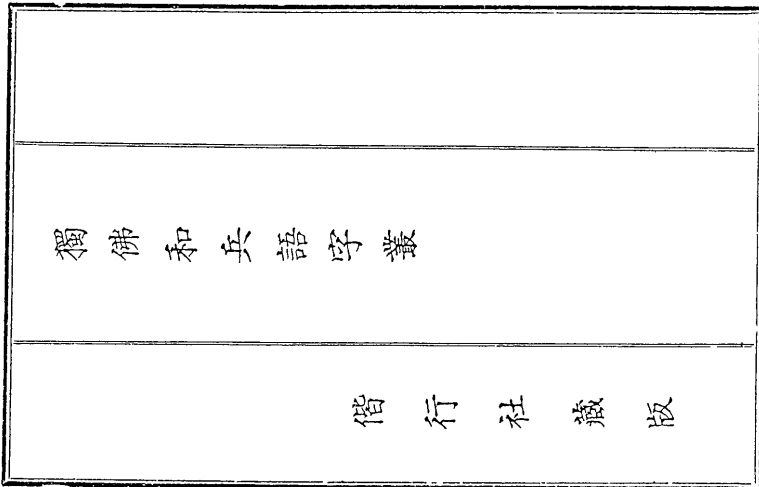


図 1-A

[ 3 ]

A		A	
ablügen	背袋ヲ削ス	Teil einer Wagenkolonne durch Uebefall	奇襲ヲ以テ車輛隊列ノ一隊ヲ削ツ
Tornister —	交代スル	abschwenken	部隊ニ差回スル。差返スル
ablösen von.....	哨兵ヲ交代スル	Abschwenken (der Kavallerie)	分隊差回。四分差回
einen Posten —	開進の差役	absetzen (das Gewehr)	照準ヲ替ル
Abmarsch	進軍令	absitzen	下馬スル。下車スル
Befehl zum —	開進スルの出發スル	abstecken	線ヲ標識スル (堡壘等ノ) 標誌ヲ標ル
abmarschieren	前車ヲ離脱スル	eine Linie —	實視スル
abprotzen	見官の辭職ニ退職	absuchen	地形ヲ偵察スル
Abschied	全上スル	das Terrain —	森林ヲ偵察スル
seinem — nehmen	發射スル。發射ヲ解	die Büsche —	地形偵察
abschiessen (entladen)	解スル	Absuchung (eines Terrains)	
abschlagen (Signal) !	發射 (發射銃銃ノ音)	abteilen	番号ヲ附スル (哨所)
abschneiden	敵ヲ逐ル	Nammern (der Posten)	
den Feind —	連騎ヲ逐ツ		
die Verbindungen			

図 2 (同志社大学図書館所蔵本より)

用せず ss とし、名詞は頭文字を大書している。日本語は楷書体活字の漢字と片仮名で記している。ドイツ語欄には見出し語、続いてその下に見出し語を含む句や用例を挙げている。しばしば見出し語自体には訳語がフランス語も日本語もなくすぐ下の句や用例に移ることがある。句では見出し語は——を使用して反復を避けているが、大文字・小文字の変動がある場合は全書している。また、目的語は……を用いて表している。見出し語は動詞と名詞が大部分を占め、形容詞・副詞は極めて少ない。品詞の別は表示していない。図解や表の類はない。各頁の収録語句数は12~14、全体で約2500の語句を収めていることになる。

上掲の第1頁は主に見出しに動詞の並ぶ個所なので、見出しに名詞の並ぶ200頁の例も挙げておこう。

Zeughaus	un arsenal	工廠
Direktor des ——es	le directeur d'un arsenal	工廠堤理
Zeugwärter	le garde d'artillerie; le garde-parc	砲兵監護。砲廠監護
Zickzack	le zig-zag	之字對壕
Ziel	le but	目標
das —— treffen	atteindre le but	命中スル
bedecktes ——	but couvert	蓋覆目標
verdecktes ——	but masqué	遮蔽目標
lebendes ——	but vivant	活動目標
todtes ——	but résistant	死靜目標
zielen	viser, pointer, mirer	照準スル。覷フ
gut ——	ajuster son coup	精確ニ照準スル
das Zielen	la visée, le pointage	照準。覷定
Ziellinie	la ligne de mire	照準線。覷線
Zielpunkt	le point de mire, le point à battre	照準點。覷點

更に 112~115 頁の Marsch の記述を、フランス語訳を省略して記載すると以下のようなものである。

Marsch	行進
angestrongter oder forcirter —— oder Zwangmarsch	兼程行軍。強行々軍
gewöhnlicher ——	平時行軍。尋常行軍
heimlicher ——	潜行々軍
künstlich beschleunigter ——	藉便急行軍 (即チ鐵道舟車ノ便ヲ 藉リテ急行スル謂ナリ)
sich in —— setzen ——! ——!	行軍スル。進軍スル
einen —— spielen	駈歩進メ
Vormarsch	行軍譜ヲ奏スル
Flankenmarsch	前進
Uebungsmarsch	側面行進
in Eilmarschen vorrücken	行軍。演習行軍
Generalmarsch	急行軍ヲ爲ス。兼程行軍スル
Marschbefehl	警急。警報
marschbereit	行軍令。發營令
Marschbereitschaft	行軍整備セル
Marschdienst	行軍整備
allgemeine Marschdirection	行軍勤務
Marschdisziplin	行軍方向
marschfähig sein	行軍々記
Marschgeschwindigkeit	行軍ニ堪ル。從軍スル
Marschkolonne	行軍速度
Marschlied	行軍縦隊。途上縦隊 進軍歌

Marschordnung	行軍序列。行軍隊次
Marschquartier	行軍舎營
Marschrout	行程
Marschschritt siehe Marschtempo !	「マルシテムポ」ヲ參觀セヨ
Marschstrasse	兵站線
Marschtag	行軍日
Marschtempo	徒歩
Marschübung in Manövrirkolonnen	行軍演習
marschiren	
freiweg —	適宜歩度ヲ以テ行進スル。 途歩ニテ行進スル
in zwei Gliedern —	二列ニテ行進スル
weiter —	更ニ行進スル。再ヒ行進スル
— lassen (zum Kriegsdienste heranziehen)	行進セシムル (戦時勤務ニ熟サシ ムル爲メ)

しばしば語句の内容についての補助説明が ( ) して加えられる。それはドイツ語見出しにも、フランス語訳、日本語訳にも見受けられる。いくつかの例を挙げよう。

頁			
63	Fusslappen	une chausette russe	足布 (正方形ノ布切ニシテ 靴足袋ニ代用スルモノ)
94	Korporal	le caporal (dans l'ar- mée allemande : unteroffizier)	伍長 (獨國陸軍ニテハ下士 ナリトス)
123	Oberst	le colonel	大佐
	Oberstlieutenant (in Frank-	le lieutenant-colonel	中佐 (佛國ノ歩兵中佐ハ獨

	reich nicht Bataillonskommandeur, sondern er steht über diesen und ist in Allem die rechte Hand des Regimentskommandeurs)		國ノ如ク大隊長ノ職ヲ帶ルモノニ非ラス諸大隊長ノ上位ニ在テ専ラ聯隊長ヲ補翼スルヲ任トス)
160	Geschwindschritt (115 à 0,75m in der Minute)	le pas accéléré	速歩 (一分時二百十五歩)
	Laufschritt (170 à 0,80m in der Minute)	pas gymastique	驅歩 (一分時二百七十歩)

巻末の「誤字録」は「此處ニ集メタル正字ハ截り取りテ貼正スルニ便ス」とあり、奇数頁にのみ印刷しその頁裏を白にして切り貼りできるように配慮しているので、(1)～(13)までで26頁分あり、訂正は全部で約190個所である。各頁の構成は左欄から頁，行，誤植，訂正の順に並んでいる。最初の頁(1)は次のようになっている。

Seite	Zeile	Druckfehler	Berichtigung
1	16	dètnché à ...	détaché à ...
2	18	abschlagen (Signal)	abschlagen (Signal) !
2	8	開進。出發	開進。進發
2	9	出發令	進發令
2	10	開進スル。出發スル	閉進スル。出發スル
2	13	退官。辭職。免職	免官。辭職。退職
3	17	èclarer le terrain	éclairer le terrain*
3	14	線ヲ經始スル。標柱ヲ樹ル	線ヲ經始スル (堡壘等ノ)。



			標柱ヲ樹ル
4	7	Abzeichen siehe Grad	Abzeichen siehe Grdd**
	4	rompre les range	rompre les rangs
5	19	nach dem Deinstalter	nach dem Dienstalter
7	2	— durch Bombardement	— durch Bombardirung
7	11	divessin, feusse at-	diversion, fausse at-
7	15	對攻。迎撃	對襲撃。迎撃
8	7	敵攻ヲ支ル	攻撃ヲ支ル
8	20	銃ヲ擬スル。藥ヲ狙	銃ヲ擬スル。某ヲ狙

筆者注 \* 正しくは *éclairer le terrain*

\*\* 正しくは *Grad*

以上のように、誤植個所のみでなく、誤植個所を含む行の語句全部を挙げています。該当行の記載順は必ずしも厳格とは言い難い。また、訂正欄に挙がっている語句にも誤植が見受けられる。

本書の現物は、京都の同志社大学図書館にも存在する。同志社大学図書館から一部コピーを取り寄せることができた。そのコピーによると、表紙には中央に大きく、肉太楷書体活字で「獨佛和兵語字叢」、その左横下に明朝体活字で「偕行社藏版」と印刷されている(図1-B)。本文203頁のみで、「誤字録」は付いていない。しかし、上記「誤字録」に載っている個所を調べてみると、同志社大学所蔵の辞書では訂正済みになっている<sup>2)</sup>。このことから同志社大学所蔵の辞書は後の版であり、本辞書は少なくとも増版されたといえる。

奥付がないので編著者・出版年等不明である。しかし、先に「明治期の兵語辞書について(二)」で取り上げた藤山治一・高田善次郎合著『獨和兵語辞書』(明治32年11月発行)がその序の中で、「本書ノ参考ニ供スル書類」として「獨佛和兵語辭叢(東京偕行社編纂)」<sup>3)</sup>を挙げているので、

少なくとも明治 32 年 11 月以前の刊行であることは間違いないので、「明治中期から後期にかけて」との西堀氏の推定は正しいといえよう。ただ、明治 42 年 11 月刊行の兵藤三郎著『最新獨和兵語辞典』（兵事雑誌社）の巻頭「緒言」の「本書ヲ編纂スルニ當タリ最モ多ク参考セル書籍」には「獨佛和兵語字叢」は挙がっていない。著者兵藤三郎は陸軍編修として参謀本部に在職していた前歴があるのだから、偕行社編纂の本書を知らないとは思えない。知ってはいたがそれほど多くは参考にしなかったから取えずに記さなかったのかもしれない。

因みに『獨佛和兵語字叢』と藤山・高田合著『獨和兵語辞書』で、A 項の始めに共に収録されている語について、その訳語を比較してみると、以下のようによく似通っている。当時の軍内部では、ドイツ語についてそれぞれ定訳があったとも考えられる。

獨佛和兵語字叢		藤山・高田獨和兵語辞書
abbrechen		abbrechen, v. (Gefecht) 停ル (戦ヲ)
das Lager ——	撤營スル	—— (Lager) 撤營スル
		—— (bei der Frontveränderung) 分解スル (正面縮少ノ際)
die Brücken ——	橋梁ヲ破壊スル	—— (die Brücke) 破壊スル (橋梁ヲ)
das Abbrechen eines Lagers	撤營	
in kleinen Abteilungen ——	小部隊ニ分解スル	—— (in kleinen Abteilungen) 分解スル (小部隊ニ)
zu Vieren ——	四分スル	—— (zu Vieren) 四伍ニ分解スル
		—— (vom Pferde) 頭勢ヲ正ス (馬ノ)
Abbrücken	撤橋。橋梁撤去	abbrücken, v. 橋梁ヲ撤スル

abfeuern (abschiessen)	放火スル。發射スル	abfeuern, v.	發射スル
abkochen	炊爨スル	abkochen, v.	炊爨スル
abkommandirt zum ……	……附ヲ命セラル	abkommandirt zum ……	……附ヲ命セラル
abkommen		abkommen, v.	航路ヲ離レル。水路ヲ失フ
		— (beim Schiessen)	觀定スル
gut —	精密ニ射撃スル	gut —	精密ニ射撃スル
zu weit —	彈着超過スル	zu weit —	彈着超過スル
von …… —	躲避スル	von …… —	躲避スル
ablegen		ablegen, v. (Tornister)	卸ス (背囊ヲ)
Tornister —	背囊ヲ卸ス	ablösen, v.	交代サセル
ablösen von ……	交代スル	Ablösung, f.	交代。交代兵
einen Posten —	哨兵ヲ交代スル	Abmarsch, m.	出發。方向變換行進。
Abmarsch	閉進。進發		退却
		— (von Kavallerie)	分隊 (騎兵ノ)
Befehl zum —	進發令	Befehl zum —	出發命令
abmarschieren	閉進スル	abmarschieren, v.	出發スル。退却スル。

藤山・高田辞書では *abbrücken* と *abfeuern* の間に 30 語の見出しが新しく加えられているし、綴りも偕行社版の *abmarschieren* が、後述する当時の新しい綴字規則に従って *abmarschieren* と改められてはいる。

上掲の *Abmarsch*, *abmarschieren* の訳語は、既述の「誤字録」に記載訂正があったところで、西堀本と同志社本を比較、検討してみよう。

西堀本			同志社本	
Abmarsch	le départ	開進。出發	le départ	閉進。進發
Befehl zum —	ordre de départ	出發令	ordre de départ	進發令
abmarschiren	partir, se mettre	開進スル。	partir, se mettre	閉進スル。
	en marche	出發スル	en marche	出發スル

我が国最初のドイツ語学者として名高い司馬凌海の子息で、明治21年から陸軍大学でドイツ語を教えた司馬亨太郎が、「日本に於ける獨逸語教授史」の中で次のように記している<sup>4)</sup>。

この時代に初めて陸軍の兵語といふものが大成されたので、自分等が寄集つて、現今の操典の中にある術語の多くを獨逸語から譯出したのである。例へば Vormarsch を前進と譯し、Rückmarsch を背進、Aufmarsch を閉進と譯したりなぞしたが、開進或は集中と譯すやうになつた。その他 Abmarsch を轉進、Anmarsch を接進、Schlüsselpunkt を鎖鑰點、Anlehnung を依托、Schwenkung を施回等と譯した。

因みに当時普及していた一般向けの独和辞典の一つである『袖珍獨和新辭林』(高木甚平・保志虎吉共編 三省堂 明治29年初版)では、Abmarsch ①退進、發進、②出發、退去；Abmarschiren 出發スル、退進スル、發進スル、退去スル としてある。上表のように西堀本では「開進」「開進スル」、同志社本では「閉進」「閉進する」で、こうした訳語のまだ定まらない術語も相当あったようである。

注

- 1) 『軍事史学』第9巻 第2号 軍事史学会編集 原 書房・並木書房発行 昭和48年9月 68頁
- 2) 同志社大学図書館から提供を受けたコピーは一部に過ぎないので、訂正個

所の全部について検したわけではない。

- 3) 正しくは『獨佛和兵語字叢』であるが、当時は一般に用字については鷹揚で、意味に大差がなくて発音が同じであれば、当てる漢字にはこだわらなかったようである。
- 4) 『高等ドイツ語講座 Blätter des höheren Kursus der deutschen Sprache』第二號（高屋爲雄編輯 獨逸語研究社発行 昭和三年一月）p. 277.

## 2

19世紀末本国のドイツでは、言語に携わる作家や教育者たち、また出版業者らにとって以前からの懸案であった正書法の統一と簡易化が成立しかけていた。1871年に帝国統一を成し遂げたプロイセンでは、1872年文相ファルク<sup>5)</sup>が、まずドイツ諸邦から代表を呼び寄せ学校会議を開催して正書法の統一について諮ったのち、1876年（明治9年）各邦国から代表委員をベルリンに召集して「ドイツ語正書法における幅広き統一制定のため」(zur Herstellung größerer Einigung in der deutschen Rechtschreibung)の会議を開催した。これが「第1回正書法会議」と呼ばれているものである。その協議の結果を後任の文相プットカーマー<sup>6)</sup>が規則書(Regelbuch)として1880年に公布したが、多くの邦国の賛同を得るにはいたらなかった。しかしこの会議に参加した言語学者 K. ドゥーデンはこれに則った「ドイツ語完全正書法辞典」(Vollständiges Orthographisches Wörterbuch der deutschen Sprache)をライプツィヒの Verlag des Bibliographischen Instituts より同1880年に刊行した<sup>7)</sup>。こうしたドイツにおける正書法制定の動向を報じた我が国最初の辞典は、登張信一郎・大黒安三郎・山田 基共著『新和獨辭典』(大倉書店 明治34年11月)であった。この辞典の巻末付録(Anhang)に以下の記載がある。

千八百八十八年<sup>8)</sup>、普國文部大臣が、獨語の綴方に就て發布したる者

の内、最も必用なる變化を、茲に載録して讀者の參考に供せん、讀者は宜しく次の必用なる六項に注意し、平常獨語を綴るには必ず此綴方に従ふべし。

(I) 母音の變形したる者には、其花文字の時たると、小文字の時たるとを論ぜず、其上に Umlaut の印を附すべし、例せば：

Ä.	<u>と記して</u>	Ae	<u>と記さざる事.</u>
ä.	〃	ae.	〃
O.	〃	Oe.	〃
ö.	〃	oe.	〃
Ü.	〃	Ue.	〃
ü.	〃	ue.	〃
Äu.	〃	Aeu.	〃
äu.	〃	aeu.	〃

(II) 従來用ひ來りし (nisz) なる語尾は (nis) に改むべし；例せば：

sing. —	Ergebnis.	<u>と記して</u>
	Ergebnisz.	<u>と記さざる事.</u>
pl. —	Ergebnisse.	

(III) 従來用ひ來りし (thum) 及 (thüm) なる語尾は、(tum) 及 (tüm) に改むべし；例せば：

Eigentum.	<u>と記して</u>	Eigenthum.	<u>と記さざる事.</u>
Ungetüm.	〃	Ungethüm.	〃
eigentümlich.	〃	eigenthümlich.	〃

(IV) [a.] (h) なる文字は、多くの言葉及其誘導詞 (Derivatium) に於て、省略すべし；例せば：

Tier.	<u>と記して</u>	Thier.	<u>と記さざる事.</u>
Teil.	〃	Theil.	〃
Tau.	〃	Thau.	〃

teuer.	〃	theuer.	〃
Teer.	〃	Theer.	〃
verteidigen.	〃	vertheidigen.	〃

〔b.〕 (h) なる文字は、又次の言葉及其誘導詞 (Derivatum) に於て、省略すべし；

Armut.	<u>と記して</u>	Armuth.	<u>と記さざる事.</u>
Atem.	〃	Athem.	〃
Blüte.	〃	Blüthe.	〃

(以下 22 語略)

(IV) (d) なる文字は、次の言葉及其誘導詞 (Derivatum) に於て、省略すべし；例せば：

Brot.	<u>と記して</u>	Brodt.	<u>と記さざる事.</u>
Ernte.	〃	Erndte.	〃
gescheit.	〃	gescheidt.	〃
Schwert.	〃	Schwerdt.	〃
tot.	〃	todt.	〃
töten.	〃	tödten.	〃
Totschlag.	〃	Todtschlag.	〃
Totengräber.	〃	Todtengräber.	〃

(V) 次の言葉は、根連字 (Wurzelsilbe) に於ては、一の母音を省略すべし；例せば：

baar.	<u>と記して</u>	baar.	<u>と記さざる事.</u>
(wie bares Geld, Barschaft.)			
Herd.	<u>と記して</u>	Heerd.	<u>と記さざる事.</u>
Herde.	〃	Heerde.	〃
Los.	〃	Loos.	〃
losen.	〃	loosen.	〃

Losung.	〃	Loosung.	〃
Mass.	〃	Maass.	〃
queer.	〃	queer.	〃
Schaf.	〃	Schaaf.	〃
Schale.	〃	Schaale.	〃

(以下 9 語略)

(附加) [a.] (e) にて終れる言葉は、其曲變 (マゲ) の前に、(e) を附し、其附したる部は、一の獨立したる綴となる；例せば：

Knice, Seen, Armeen, Theorieen, 等の如し。

[b.] 不定法 (Infinitiv) の語尾の (iren) は、現今 (ieren) として綴られる；例せば：

probiren. を probieren. と記す如し。

次いで言語表 (Das Verzeichnis der Wörter.) が続く。

[この言語表は、1880 年普國文部大臣が、普國各學校に於て、獨語の綴方を一定せしめん爲めに、發布したるものなり、今こゝに轉載したる所以の者は、本書にある獨語の綴方もこれに則りたればなり、讀者は宜敷此言語表を參考し、日常其綴方を熟知するを可とす。注意：

( ) 中にある獨語の綴は又用ゆるを得.]

以下 31 頁にわたって約 3600 語の語彙をリストしている。

因みに付言すれば、1901 年 (明治 34 年) にドイツ帝国の他、オーストリア、スイスの政府代表も参加して開催されたベルリンでの第 2 回正書法会議いわゆる「六月会議」では、プロイセンの規則書をたたき台とし、その修正と簡易化が行われ、その成果からプロイセンが 1902 年に「ドイツ語正書法規則と言語表」(Regeln für die deutsche Rechtschreibung nebst Wörterverzeichnis. Herausgegeben im Auftrag des Königlich Preußischen



Ministeriums der geistlichen, Unterrichts- und Medizinal-Angelegenheiten.) を公刊, これが官庁並びに学校教育にも採り入れられて, ようやく全土に定着していくのである<sup>9)</sup>。この1901年の「六月会議」のことを記した本邦最初の辞典は藤井信吉編『二十世紀獨和辞書』(金港堂書籍株式会社 明治40年5月)である。

『獨佛和兵語字叢』が明治30年(1897)頃の刊行であるとすれば, プロイセンの作成した規則書やドゥーデンの『完全正書法辞典』は既に公刊済みであるから見出し語がそれに従っていてもよい筈であるが, 実際には日本にそれが正しく伝わっているかどうかは疑問であり, さらには準拠した原著が1880年以前の出版のものである可能性は高い。『獨佛和兵語字叢』の綴字を検討してみると, 例えば変母音は, 大文字はまだ *Oeffnung, Ueberfall, Uebungen* とする一方で小文字は *öffnen, überflügeln* としている。Thor, Ausfallthor, todt と綴られていたり, 不定法の語尾の *-ieren* についてもまだ *abmarschiren, aggregiren, approachiren, markiren, marschiren* … などとしているが, *spielen* も見受けられる。しかし先に見た藤山・高田合著の『獨和兵語辞書』でも, *todter Winkel* が見られ, *abmarschieren* とする一方で *aggregiren, approachiren* としていて, やはり不完全である。

偕行社は, 陸軍士官の組織で, 兵学の研究を通じて親睦を計る目的で明治10年2月に結成され, 機関紙『偕行記事』をはじめ兵書の発行や会員の相互扶助を行った。因みに海軍士官と高等文官の団体である水交社はその前年の明治9年に結成されている。一方, 第二次フランス軍事顧問団の指導を受けた将校たちの一派は, 陸軍のプロイセン化を不満として明治14年「月曜会」という別組織を作った。メンバーに寺内正毅, 東條英教, 井口省吾も名を連ねている。会員が次第に増大し, 主流のプロイセン派に対する反主流フランス派の牙城となっていくのを憂えた陸軍次官桂 太郎は, 月曜会の偕行社への吸収を画策, その結果明治22年2月陸軍大臣大山 巖が月曜会に内命を下してこれを解散させ, 翌23年2月偕行社で天

皇を迎えて両メンバーの統一式を行ったのである。こうした事情からすると、偕行社蔵版『獨佛和兵語字叢』は、陸軍内部のプロイセン派とフランス派の和合の産物とも見られ、本書は偕行社の内部で配布し、市販されなかったとも考えられる。

注

- 5) Adalbert Falk. 1827-1900. プロイセンの官僚で 1872 年から 1879 年まで文化相 (Kultusminister) であった。
- 6) Robert von Puttkamer. 1828-1900. プロイセンの官僚で 1879 年から 1881 年まで文化相 (Kultusminister) であった。
- 7) Konrad Duden. 1829-1911. この所謂「ドゥーデン初版」の著者としての彼の肩書きはヘルスフェルト王立ギムナジウム校長 (Direktor des Königlichen Gymnasiums zu Hersfeld) であった。
- 8) 千八百八十年の誤植ではないかと思われる。
- 9) ドイツ語正書法はこの後約 1 世紀を経て改革が行われた。1994 年 11 月 22 ~24 日ドイツ語圏諸国からの委員がウィーンで正書法会議を開催して新規則を作成、多少の修正を加えて 1996 年 7 月 1 日に合意を得た改正案が 1998 年 8 月 1 日から導入された。一部文化人らの反対があったが、官庁・学校教育・ジャーナリズムの分野で次第に採用されて普及している。2005 年 7 月 31 日までの移行期間としてそれまでは旧正書法の使用も容認されているが、以後は新正書法に統一されることになっている。

## 7 最新獨和兵語辞典

### 1

国会図書館に収蔵されているものによって記述をすすめる。惣郷正明・朝倉治彦編『辞書解題辞典』(東京堂出版 昭和 52 年)には以下のように記載されているものである。

さいしんどくわへいごじてん 兵藤三郎著 兵事雑誌社 明四二・一  
一 六四四頁 172×90 二円五〇銭 横一組三三行。ドイツ語はラ  
テン体。寺内正毅<sup>10)</sup> 題字，東条英教中将・大島健一少将序，著者は  
参謀本部勤務。先行の藤山，高田両氏『独和兵語辞典』(明三二)<sup>11)</sup>  
より五割増の語数と，緒言に述べている。〈例〉abmarschieren, v. 方  
向変換行進ス。出発ス。退却ス。独文標題 Das Neueste Deutsch-  
Japanische Militärwörterbuch

濃い赤紫色の分厚い堅紙表紙には，中央に描かれた木の葉（柏？）模様  
の飾りの中に星形の下の左横書きで「最新」，縦書きで「獨和兵語辞典」  
の文字が包まれ，その下に左横書きで「兵藤三郎著」と「兵事雑誌社版」  
が2行記されている。

本文頁の大きさは，筆者の測定では縦17,2cm×横9,2cmである。

扉には次のように記されている（図3）。

**DAS NEUESTE / DEUTSCH-JAPANISCHE / MILITÄR-  
WÖRTERBUCH / von S. HYODO** || 前陸軍編修兵藤三郎著 / 最  
新獨和兵語辞典 | 全 / TOKIO, 1909. / 兵事雑誌社發行

扉に続いて寺内正毅の筆になる墨書の題辞「兵家之 關鍵 正毅題 印  
璽」が3頁にわたって掲載されている。寺内正毅は先に『明治期の兵語辞  
書について (二)』の「2 改正兵語辞書 獨和對譯之部 第一」の項で  
述べたように，改正兵語辞書審査委員の幹事を努めた。本書の刊行された  
明治42年秋当時寺内正毅は陸軍大將子爵で，前年7月に成立した第二次  
桂内閣の陸軍大臣の要職にあった。

次の二つの序がそれに続く。まず陸軍中将東条英教の次の序がある。

#### 序

舊知兵藤三郎氏獨和兵語辞書ヲ編ミ。頃日來リ示シテ予カ序文ヲ需

獨和兵語辭典序

取於人以爲普他山之石可以攻玉是我國  
 是之所以求知禮於世界也今也我軍事大進  
 益期其精是以講究徧及歐籍如獨逸書殊多  
 而無良好兵語辭書爲初學感之頃者兵藤前  
 編修有斯著脈余索一言曰愚先自小者始其  
 大者方在編纂中焉嗚呼編修能知時之需用  
 早夜匪弛爲斯學謀其志可謂偉矣此一冊  
 子已見所裨補不尠也則異日大著之勳亦不  
 難于推知余安得不樂而待之乎遂欣然序之

明治己酉晚秋

陸軍少將 大島健一

図 4

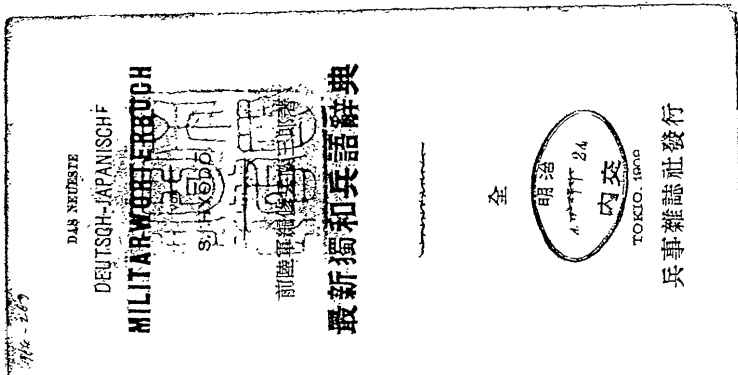


図 3

ム。氏ハ世間知名ノ公法學者ニシテ、曩ニ陸軍編修トシテ職ヲ參謀本部ニ奉ジ、多年陸軍兵書ノ翻譯ニ從事シタル人ナリ。聞ク氏ガ此書ヲ編纂スルヤ、我が邦ノ公文書上一定ノ譯例アル兵語ヲ網羅スルコトヲ主トシタルハ勿論、ソノ他一定ノ譯例ナキ兵語ニ就イテハ氏ガ多年幾多ノ兵書ヲ涉獵シ、深ク研鑽シタル結果、最モ妥當ナリト認メタル譯語ヲ選定シテコレニ當テ箝メ、以テソノ足ラサル所ヲ補ヘリト。予ハ固ヨリコレヲ通讀シテ各個ノ譯語ニ就キ普ク其當否ヲ判スルノ間ヲ得ズト雖モ、ソノ中ニ就キ點々閱讀シタル結果ニ徴シ、又氏ガ經歷ト精緻ナル腦力ト學ニ篤キ性質トニ考ヘ、而シテ一方ニハコノ書ガ内容ノ豊富ナル點ニ於テ從來我が邦ニ行ハル、同種類ノ書ニ冠タルニ推シ、予ハ將來獨乙兵書ヲ繙カントスル者ノ爲コノ書ガ多大ナル便益ヲ與ヘンコトヲ信ジ、由リテ以テ我が軍事界ノ進運上偉大ナル効力アラシク期シ、大ニコノ書ノ顯出ヲ歡ビ迎フルモノナリ。抑モ氏ハ世人ノ知ル如ク一個ノ堰武論者ニシテ、而モ嘗テカヲ軍衛ニ盡シ、今復タ這般ノ著述ヲ爲シ、以テ飽クマデ我軍事界ニ盡スモノ、予ハコノ間一種多大ナル趣味ヲ感セサル能ハサルナリ。蓋シ氏カ堰武說ヲ唱フル所以ノモノハ、畢竟コレ國際關係ノ改善ニ依リテ永久ノ平和ニ到達セント欲スル一哲人トシテノ理想ニ基ヅクモノニシテ、ソノ軍事界ニ盡スコト尚ホ斯ノ如クナル所以ノモノハ、世界顯狀ノ繼續スル限り軍事ノ決シテ忽ニスヘカラサルヲ認ムル一國民トシテノ義務心ニ基ヅクニ他ナラス。以テ氏ガ彼ノ深遠ナル理想ニノミコレ耽リ現實世界ニ對スル急務ヲ等閑視スルカ如キ學者輩トソノ揆ヲ一ニセザル人タルヲ見ルベシ。予ハ深くコノ點ヲ多トシ、茲ニ快ク氏ガ需ニ應ジ、所感ヲ記シテ以テ序ト爲スト云爾。

明治四十二年秋日

東京郊外大久保の寓居に於いて

陸軍中將 東條英教

序文注

點々：あちこち。

顯出：世にあらわれ出ること。

堰武：堰武は堰武に通じ、「武器をかたづけて用いない」の意。『書經』の「武成」に「王朝に周自ら歩き、于きて商を征伐す。厥の四月哉生明、王自らり來り、豊に至る。乃ち武を偃せ文を修め、馬を崑山の陽に歸し、牛を桃林の野に放ち、天下に服せざるを示す。」(王は朝早く周から出かけていって商を征伐した。その四月の日が初めて明るくなった日に王は商から帰って旧都の豊に着いた。そこで武器はしまつて文徳を布き、馬を崑山の南におくり牛を桃林の野に放つて天下にもう用いないことを示した)<sup>12)</sup>とあるによる。即ち堰武論者とは平和主義者のことである。

軍衛：軍の役所。

趣味：おもむき、味わい。

顯状：現状に同じ。

決：決に同じ。

云爾：以上の通りである。

東條英教は明治40年11月7日中将に昇進すると同時に予備役に編入されている。日米戦争の戦犯となった東條英機の父親である。彼は陸軍大学の一期生で、しかも首席卒業の英才であった。兵学の大家として軍部内で知られていたが、理論に勝って実践向きではなかったと言われている人物である。彼について黒野 耐は『参謀本部と陸軍大学校』の中で、「ドイツ陸軍をモデルにして近代化を進めていた当時の陸軍にあつて、東條はクラウゼヴィッツの『戦争論』を理解した数少ない人材」とであるとし、彼の歴任の跡をたどって「中将の階級で予備役に編入されているが、これは陸大首席卒業生としては、けつして恵まれた経歴とはいえない。彼が南部藩の出身だったためと思われるが、息子の英機は、陸大首席の父が薩長閥から冷遇されるのを見て育ち、彼らに反感を抱くようになる。」と書いている<sup>13)</sup>。彼の序文は2頁にわたり左横書きで、漢字とカタカナ、句読点や濁点の使い方に今日のそれと合わない個所もある。この中の記述によれば、

著者の兵藤三郎は元陸軍参謀本部に勤務して外国兵書の翻訳と編修に従事していた人物であることがわかる。また、兵藤は公法学者として著名であるとも紹介しているが、やはり兵藤が明治45年に著した『最新和獨兵語辞典』の序でも陸軍少将河合 操が同様に「益友元陸軍編修兵藤君夙ニ公法學ヲ以テ顯レ又獨逸語學ニ精通ス明治三十七八年戰役起ルヤ選ハレテ第三軍司令部ニ公法顧問タリ」と記している。

続く大島健一の序文(図4)は、所謂「和臭漢文」であるが、左横書きになっているのが珍しい<sup>14)</sup>。

#### 獨和兵語辞典序

人に取りて以って善と爲し、他山の石以って玉を攻む可し。是れ我が國是の知識を世界に求むる所以なり。今や我が軍事大いに進み、益々その精を期す。是を以って講究偏く歐籍に及び、獨逸書の如き殊に多くして、良好なる兵語辞書無し。初學の爲に之を憾む。頃者兵藤前編修に斯の著あり。余の索むるを眎て一言して曰く、是れ先ず小なる者より始め、其の大なる者は方に編纂の中に在り、と。嗚呼、編修能く時の需用を知り、早夜黽勉斯學の爲に謀る。其の志、偉と謂ふべし。此の一小冊子己の見る所、裨補尠からざる也。則ち、異日、大著の効も亦た推知するに難からず。余、安んぞ樂しまずして之を待つを得んや。遂に欣然として之に序す。

明治己酉晩秋

陸軍少將 大島健一

#### 序文注

他山の石以って玉を攻む可し：出典『詩經』小雅「鶴鳴」；よその山から出る粗悪な石でも自分の玉を磨く砥石に使える；他人の失敗や悪行も、それを参考として自分の人徳を磨くことができる。

講究：物事の本質を調べ究める。

このごろ  
頃者：近頃。

さきの  
前編修：「編修」は編纂に携わる役人、元編修官。

もと  
索むる：手ずるによって探し求める。

み  
眈：視に同じ。

早夜：朝晩。

ひんべん  
黽勉：勉め励む。

謀る：先を見とおして、打つべき手を打つといったこと。

ひは  
裨補：細部の補い。

異日：他日、将来。

明治己酉：明治四十二年。

(大意)

他人から何かを得て（自らの）プラスとするものだし、他人のよくないところさえも自らを磨くきっかけにできる。これが、広く世界に知識を求めるということを、我が国が、国としての方針としている理由である。近頃兵藤前編修官がこの書物をつくり、私が（その種の辞書を）探し求めているのを目にして、一言、「これはまず手始めに小さいのから作り始めたもので、大きなのは今編集中です」と述べた。この小さな冊子にしても、私の見るところでは、これまでの不足を補うところが少なくない。であるから、いずれ刊行される大著がどれほど役に立つかも容易に推して知ることができる。私はどうしてそれを楽しみにしないで待つなどということができようか（今から楽しみでならない）。というわけで、とうとう喜びのあまり序文を書いてしまったというわけである。

大島健一<sup>15)</sup> はドイツ、フランスに駐在の経歴を持ち、語学・学識の豊富さで参謀本部内でも評判の軍人であった。本辞典の刊行年当時彼は参謀本部総務部長兼第4部長を務めていた。この二つの序文のあと、著者自身の次のまえがきが続く。



### 緒 言

- 一、余明治二十八年ヨリ同四十年ニ至ルマデ參謀本部ニ在リテ翻譯編纂ノ事ニ從ヒ其間獨逸兵語ノ未タ我國ノ辭書ニ採録セラレサルモノヲ發見スル毎ニ之ヲ手記シテ備忘ト爲シ遂ニ數多ノ小冊子ヲ成シタレハ兵事雜誌社ノ懇囑ニ依リ其譯語ヲ校訂シ並ニ中外諸書ヲ參酌シ以テ本書ヲ編纂セリ回顧スルニ明治十三年始メテ參謀本部ノ五國對照兵語辭書出テ、ヨリ年ヲ閱スル十有九ニシテ藤高二氏ノ獨和兵語辭書アリ爾來又十年ニシテ本書成ル之ヲ二氏ノ書ニ比スルニ語數ニ於テ約十分ノ五ヲ増加スルヲ得タリ唯耻ツラクハ十年進歩ノ痕ナキコトヲ
- 一、本書ハ袖珍ノ目的ヲ以テ簡約ヲ旨トシタルモ余ノ實驗ニ基ツキ必要ヲ認メタル原語ニハ往々註釋ヲ加ヘ或ハ細密ノ表ヲ添ヘタリ
- 一、譯語ハ我最新ノ兵語ニ據ランコトヲ勉メタルモ猶舊譯ヲ並存セルハ舊書繙閱ノ便ニ供センカ爲メナリ
- 一、本書ヲ編纂スルニ當タリ最モ多ク參考セル書籍左ノ如シ
  - 一、「アルテン」氏陸海軍大辭典 本年發行第一冊乃至第七冊
  - 一、「ボーテン」氏兵語辭典 全九卷
  - 一、「フロベニウス」氏兵語辭典 全一卷
  - 一、「マイエル」氏大辭典 全二十一卷
  - 一、參謀本部編纂五國對照兵語辭書 附圖共 全二卷 (明治十三年發行)
  - 一、同上改正兵語辭書獨和對譯ノ部 第一及第二 二冊 (明治二十三年發行)
  - 一、藤山高田兩氏獨和兵語辭書 全一卷 (明治三十二年發行)

明治四十二年仲秋

著 者 識

著者は、まず自己の経歴を述べる。東條の序文にもいうように、参謀本部で明治28年から40年まで翻訳や編纂に従事していたことを明らかにしているが、公法学者としての履歴については触れていない。次いで本書が独和兵語辞書として藤山治一・高田善次郎合著の『獨和兵語辞書』（初版明治32年11月）から十年を経て成ったことを述べている。因みに言えば、

本書発売当時の『獨逸語學雜誌』（獨逸語學雜誌社発行）には『獨和兵語辞書 四版』の広告（図5）が度々掲載されており — 例えば第12年第1号（明治42年9月1日発行）の巻末広告頁一，さらに同誌第15年第8号（大正2年4月1日発行）には『獨和兵語辞書 第五版』の広告が大きく掲載されている。藤山・高田合著の『獨和兵語辞書』は当時まだ好調の売行きを示していたのである。兵藤はまた本書の収録語数とその先輩の書より50%増加していることを述べている。本書の本文は各頁32行（部分的に33行）横1段組み644頁で、収録の見出し語を1行1語とやや多めに数えるとすれば、 $32 \times 644 = 20608$ で約2万語である。藤山・高田の兵語辞書が約1万3千、増補を加

# 獨和兵語辞書

陸軍大學校教官 陸軍教授 藤山治一  
陸軍大學校教官 陸軍教授 高田善次郎 合著

全壹册 四版 總クロス背皮金字入

正價金壹圓七拾錢 郵税金拾錢

本書は戰術語戰略語は勿論歩騎砲工に關する兵語、經理其他人馬衛生等の術語を網羅し又最も重要な海軍術語を收む殊に書中の校閲は各専門家其勞を取られたり本書の如きは蓋し斯界の良書なり

図5

えても1万4千であったから、5割増しと謳うは妥当といえよう。

緒言の三つ目に編纂に際し参考とした書籍を記載しているが、外国書として挙げている最初の3点は欧文名を記していないので原書を突きとめることができない。この中で「マイエル」氏大辞典 全二十一巻」とあるのは、百科辞典として普及していた *Meyers Konversations-Lexikon. Eine Encyclopädie des allgemeinen Wissens. Leipzig und Wien. Bibliographisches Institut.* と思われる。またフロベニウスについては、ハンブルクに *Georg Ludwig Frobenius* という書籍商がいた記録があり<sup>16)</sup>、著者名でなく出版人である可能性がある。

次に「略語解」が1頁あるが、記載されているのは以下の12語のみである(図6)。

*adj.* 形容詞 *adv.* 副詞 *f.* 女性名詞 *imperat.* 命令法

*int.* 間投詞 *m.* 男性名詞 *n.* 中性名詞 *pl.* 複数

*p.p.* 過去分詞 *prep.* 前置詞 *s.* 看ヨ *v.* 動詞

#### 注

10) 寺内正毅とあるのは誤植で、寺内正毅(まさたか)が正しい。嘉永5年長州藩士の家に生まれ、維新後陸軍入りをし、明治15~19年フランスに留学、帰国後陸軍士官学校校長を振り出しに教育総監(明治31)、参謀本部次長(明治33)、陸軍大将(明治39)、元帥(大正5)、内閣総理大臣(同年)と、主に軍政・教育部門の出世コースを登り、山縣有朋、桂 太郎に次ぐ長州軍閥の巨頭となった。大正8年病没。以上は主として『日本近現代人名辞典』(吉川弘文館 2001年)による。

11) 正しくは『獨和兵語辞書』。

12) 小野沢精一著『新釈漢文体系 26 書経下』(明治書院 昭和60年)による。

13) 講談社現代新書 1707 2004年3月 P.70。さらに東條英教については『明治期の兵語辞書について(二)』の注12)も参照。彼は兵事雑誌社から、以下の著書を出版している。『歩兵教練の栞』『戦術應用例』『新舊獨逸歩兵操典對照私解』『日本野外要務令對照 獨乙野外要務令譯解 全三巻』。

略語解

<i>adj.</i>	形容詞
<i>adv.</i>	副詞
<i>f.</i>	女性名詞
<i>imperat.</i>	命令法
<i>int.</i>	間投詞
<i>m.</i>	男性名詞
<i>n.</i>	中性名詞
<i>pl.</i>	複數
<i>pp.</i>	過去分詞
<i>prep.</i>	前置詞
<i>s.</i>	看詞
<i>v.</i>	動詞

a = Art, m. (女) 砲兵隊ノ軍位。官平方メートル位。(兵ノ頭名階)

A. = Artillerie, 砲兵。チホスニアリ。

A. B. = Ausführl. bestimmung, 履行規則。チホスニアリ。

abbäsen, v. 野原ノ草ヲ食盡ス。

Abbau, m. 鑛山(無煤電氣鑛山ノ)鑛レ家(附近ノ村落ニ屬スル鑛山家屋)

abbefehlen, v. 命令ヲ取消ス。命令ヲ變更ス。

abberufen, v. 召還ス。

abbiegen, v. 頭勢ヲ正ス(馬ノ)。折進ス。

Abbietungsverfahen, n. 入札ノ際同一最低額ノモノ二人以上アルトキ更ニ競逐スル方法。

abblassen, v. 騎兵ニテ是知チ命令ス。騎兵ニテ演習ノ終結ヲ報ス(美國)。騎兵ニテ演習ノ來ルチ集ムタル時騎兵ニテ其通過シ了リタルチ報ス(同國)。捕虜ノ爲メ火藥ノ少量ヲ隨身ニ燃ヤカシ。熱氣體積ノ安全斷新ノ坑貫セルトキ斷ル也。

abblenden, v. 艦船ノ燈光ヲ遮斷ス(戰時ニテガ水雷ノ攻撃ヲ避ケンガ爲メ)。

なお、東條及び次の大島については、秦 郁彦編『日本陸海軍総合事典』(東京大学出版会 1991)、福川秀樹編著『日本陸軍将官辞典』(㈱芙蓉書房出版 2001)を参考した。

- 14) 日本語の横書きについては屋名池 誠著『横書き登場 —日本語表記の近代—』(岩波新書 863 2003年)が参考になる。ただしこの書の中でも漢文の左横書きについては触れるところがない。
- 15) 大島健一は安政5年生まれ。参謀本部長山縣有朋の副官で、総務部長から参謀次長に昇進、大正3年4月第二次大隈内閣では陸軍次官であったが5年3月岡 市之介に代って陸軍大臣となり、続く5年10月成立の寺内正毅内閣でも陸軍大臣に留任した。7年10月青島守備軍司令官を勤めて8年6月予備役編入。昭和に入って日独伊三国同盟締結の推進者となった。昭和22年3月歿。
- 16) Hand-Lexikon der deutschen Presse und des graphischen Gewerbes. Eine Enzyklopädie des Wissens und der Erfahrungen in der Praxis des Verlegers, Redakteurs und Druckers. Hrsg. unter Mitwirkung bewährter Fachmänner von Oskar Webel. Leipzig, Webel 1905. 参照。

## 2

本文で見出し語はラテン字体で、Bを使用せずssとしている。見出し語に発音は示していない。見出し語には名詞と動詞が多く、略語表にも見られるように冠詞、代名詞、接続詞、数詞は採り入れられていない。名詞は頭字を大書し、性を *m. f. n.* の記号で表示するが、複数形は挙げてない。動詞は自動詞・他動詞の区別なく *v.* とし、変化形は挙げてない。熟語・慣用句の類は改行して1字下げて見出し語を —— で表示し反復を避けている。訳語は漢字と片仮名で簡潔に羅列、緒言に述べているように訳語のあとにしばしば ( ) で註釈が加えられている。本文の記述例として、143頁及び動詞 *fassen* の項を示しておこう。

143頁

Einbruch, *m.*

侵入。闖入。入寇。襲來。

Einbuchtung, <i>f.</i>	灣。
eindämmen, <i>v.</i>	堤ニテ圍ム。
eindringen, <i>v.</i>	侵入ス。
einebenen, <i>v.</i>	平坦ニス。
einen Schuss erhalten	射撃ヲ受ク。
einexerzieren, <i>v.</i>	教練ス。
Einexerzierung, <i>f.</i>	教練。
einfach, <i>adj.</i>	單簡。
——e Blendung.	單盲障。
——e Erdwalze.	土單對壕。
——er Posten.	單哨。
——er Verweis.	單純譴責 (Verweis ヲ看ヨ)。
——e Sappe.	單對壕。
——es Bündel.	單浮包。
——e volle Sappe.	單對壕 (塙國ノ)。
einfallen, <i>v.</i>	侵入ス。入寇ス。

動詞 fassen についての記述は以下の通りである。

fassen, <i>v.</i>	摑ム。握ル。捕フ。受領ス (塙國及南部獨逸ノ兵語)。
einen Entschluss ——	決心ヲ爲ス。
festen Fuss ——	確呼タル立脚地ヲ占ム。
im Rücken ——	背後ヲ襲フ。
in der Flanke ——	側面ヲ衝ク。
Mut ——	氣ヲ勵マス。
sich auf etwas gefasst machen	覺悟ヲ爲ス。
Tritt ——	歩調ヲ取ル。

Tritt gefasst !

歩調ヲ取レ !

正書法についていえば、特に **th** における **h** の省略がなされていないのが目立つ。例：**Thal** 谷。山谷。河孟。；**That** 行爲。功績。動作。犯罪。；**Thon** 粘土。陶土。；**Thor** 門。城門。關門。；**thun, Dienst** —— 職務ヲ盡クス。；**Thür** 門。戸。入口。など。また動詞不定詞の **-ieren** と **-iren** の混用が見られる。その他 **Heerd** 底堦（溶鑪）。；**Masz** 度量。尺度。斗（マス）。；**Masze** 節度。手段。方法。度量。など。

緒言に藤山治一・高田善次郎合著の『獨和兵語辞書』との比較に触れ、「二氏ノ書ニ比スルニ語數ニ於テ約十分ノ五ヲ増加スルヲ得タリ唯耻ツラクハ十年進歩ノ痕ナキコトヲ」と述べているので、試しに両書の記述を比較してみよう。まず藤山・高田書の6頁と兵藤書の10頁 **abralen** から **Abrafung** まで（図7、図8）を見比べると、

藤山・高田書	兵藤書
<b>abralen, v.</b> 反跳スル	<b>abralen, v.</b> 反跳ス。 <b>Abprallung, f.</b> 反跳。
<b>Abprallwinkel, m.</b> 反跳角	
<b>Abprallungswinkel, m.</b> 同上	<b>Abprallungswinkel, m.</b> 反跳角。
<b>abprotzen, v.</b> 前車ヲ解脱スル	<b>abprotzen, v.</b> 前車ヲ解脱ス。
<b>abputzen, v.</b> 整截スル（束柴ヲ）。網端ノ解處ヲ截徐スル	<b>abputzen, v.</b> 整截スル（束柴ヲ）。網端ノ解ケタル部分ヲ截徐ス。磨ク。掃徐ス。梳ル（馬ノ毛ヲ）。
<b>Abrahamsschoss, m.</b> 危険外ニ在ル觀戰丘	<b>Abrahamsschoss, m.</b> 危険外ニ在ル觀戰丘。
<b>abraken, v.</b> 浮揚サスル（洲ニ膠住セ	<b>abraken, v.</b> 浮揚セシム（洲ニ膠住セ

ル船ヲ)	ル船ヲ)。
abrasiren, v. 毀平スル	abrasiren, v. 毀平ス。
Abrechnung, f. 決算。檢算	Abrechnung, f. 決算。檢算。
Abrechnungsquittung, f. 檢算證書	Abrechnungsquittung, f. 檢算證書。
Abreibekappe, f. 烙彈擦鑲	Abreibekappe, f. 烙彈擦鑲。
abreiben, v. 擦り去ル。磨キ落ス	abreiben, v. 擦り去ル。磨キ落ス。
abreißen, v. 引キ離ス。裂キ離ス。破 壞スル。脱スル (蹄鐵ヲ)。 製圖スル	abreißen, v. 引キ裂ク。裂キ離ス。破 壞ス。脱ス (蹄鐵ヲ)。製 圖ス。
abreiten, v. 駢測スル。出馬スル	abreiten, v. 乗り疲ラス。
abrichten, v. 訓練スル (新兵ヲ)。調教 スル (馬ヲ)	abrichten, v. 駢測ス。出馬ス。
Abrichtung, f. 同上スル	abrichten, v. 整フ。正ス。訓練ス (新 兵ヲ)。調教ス (馬ヲ)。
Abriss, m. 圖書。草案。摘要	Abrichter, m. 規正者。訓練者。調教 者。
abrücken, v. 發進スル。退却スル	Abrichtung, f. 規正。訓練。調教。
Abruf, m. } Abrufung, f. }	Abriss, m. 圖。雛形。草案。設計。摘 要。
(der Soldaten). 招回 (兵 卒ノ)	abrücken, v. 發進ス。退却ス。
	Abruf, m. 招回。
	abrufen, v. 召還ス。
	Abrufung, f. 招回。

増加された新語は *abregnen* v. 雨霽ル と *abrufen* v. 召還ス の 2 語のみであり、他の語の訳語も大変似通っていて、後書は前書を下書きに利用したのではないかと疑われるほどであるが、既述のように軍部内で定訳があるものについては敢えて変えなかったとも考えられる。緒言でも「譯語ハ我最新ノ兵語ニ據ランコトヲ勉メタルモ猶舊譯ヲ並存セルハ舊書



abprallen, <i>v.</i>	反跳スル
Abprallwinkel, <i>m.</i>	反跳角
Abprallungswinkel, <i>m.</i>	同上
abpretzen, <i>v.</i>	前軍ヲ解散スル
abputzen, <i>v.</i>	裝束ヲ掃除スル
	解馬ヲ掃除スル
Abrahamschoss, <i>m.</i>	角餘外ニ在ル觀戰正
abraken, <i>v.</i>	浮揚キスル(洲ニ墜住セル)
abrasiren, <i>v.</i>	毀壞スル
Abrechnung, <i>f.</i>	決算。換算
Abrechnungsquittung, <i>f.</i>	換算證書
Abreibekappe, <i>f.</i>	發射帽蓋
abreiben, <i>v.</i>	掃リ去ル
abreissen, <i>v.</i>	引き離ス。裂キ離ス。溝溝
	スル。脱スル(脚蹠ヲ)裂開
abreiten, <i>v.</i>	砂割スル。出馬スル(スル)
abrichten, <i>v.</i>	訓練スル(新隊ヲ)訓練ス
Abriechung, <i>f.</i>	同上スル
Abriess, <i>m.</i>	圍塞。埋塞。掃蕩
abrücken, <i>v.</i>	發退スル。退却スル
Abrief, <i>m.</i>	(der Soldaten) 招回(兵卒)
Abriefung, <i>f.</i>	
abrüsteten, <i>v.</i>	兵器ヲ奪フ。防備ヲ解フ
absäbeln, <i>v.</i>	斬リ去ル。屠戮スル
absägen, <i>v.</i>	鋸斷スル
absatteln, <i>v.</i>	鞍具ヲ脱スル
absatz, <i>m.</i>	越臺。靴ノ踵
absatzscheu, <i>adj.</i>	拍軍勢急
abschatten, <i>v.</i>	老弱ヲ遣フ。略加スル
abschätzen, <i>v.</i>	(die Distanz) 推測スル(距離ヲ)

図7 (藤山・高田書)

Abplattung, <i>f.</i>	同上スル意。
abprallen, <i>v.</i>	反跳ス。
Abprallung, <i>f.</i>	反跳。
Abprallungswinkel, <i>m.</i>	反跳角。
Abprallwinkel, <i>m.</i>	同上。
abpretzen, <i>v.</i>	前軍ヲ解散ス。
abputzen, <i>v.</i>	裝束(束柴ヲ)。脚蹠ノ
	解ケル。掃除ス。靴(馬ノ
	毛ヲ)。
Abrahamschoss, <i>m.</i>	危險外ニ在ル觀戰正。
abraken, <i>v.</i>	浮揚キスル(洲ニ墜住セル)
	船ヲ)。
abrasiren, <i>v.</i>	毀壞ス。
Abrechnung, <i>f.</i>	決算。換算。
Abrechnungsquittung, <i>f.</i>	換算證書。
abregnen, <i>v.</i>	洒瀟ス。
Abreibekappe, <i>f.</i>	發射帽蓋。
abreiben, <i>v.</i>	掃リ去ル。磨キ磨ス。
abreiten, <i>v.</i>	引き退ク。退キ離ス。溝溝
	ス。脱ス(脚蹠ヲ)裂開ス。
abreiten, <i>v.</i>	乘馬ス。出馬ス。
abrichten, <i>v.</i>	整フ。正ス。訓練ス(新兵
	ヲ)訓練ス(馬ヲ)。
Abriecher, <i>m.</i>	拍正者。訓練係。訓練者。
Abriechung, <i>f.</i>	拍正。訓練。脚蹠。
Abriess, <i>m.</i>	圍。屠戮。掃蕩。屠。捕
	獸。
abrücken, <i>v.</i>	發退ス。退却ス。
Abrief, <i>m.</i>	招回。
äbrufen, <i>v.</i>	召還ス。
Abriefung, <i>f.</i>	招回。

図8 (藤山書)

緋閥ノ便ニ供センカ爲メナリ」と断り書きがある。藤山・高田書での *Abprallwinkel* のアルファベット順の見出し語としての位置の誤りは訂正されているが、兵藤書では見出し語 *abreiten v.* が重複しているのは腑に落ちない。更に別の頁を比較してみる。藤山・高田書 137 頁と兵藤書 208 頁の *Fuchsschecke, f.* 駁栗毛 (馬) から *Führungswarzen, pl.* 弾筈までの記述を見比べると、兵藤書の新たな見出し語は *Fuchtel, f.* 劔。刃。 *Fugasse, f.* 擲石地雷。 *Fühler, m.* 接觸兵。の 3 語で、また新たな用例として *Führung* に *die Klingen haben* —— 鋒刃相觸ル (擊劔ノ)。 *führen* に *das Kommando* —— 司令タリ。司令權ヲ行使ス。 *Krieg* —— 交戦ス。戦争ヲ爲ス。 *den Oberbefehl* —— 統帥ス。司令權ヲ有ス。の 4 例が加わっているだけであり、先述の比較と同様のことが言えるのである。

藤山・高田書	兵藤書
<i>Fuchs, m.</i> 栗毛 (馬)	
<i>Fuchsschecke, f.</i> 駁栗毛 (馬)	<i>Fuchsschecke, m.</i> 駁栗毛 (馬)。
	<i>Fuchtel, f.</i> 劔。刃。
	<i>Fugasse, f.</i> 擲石地雷。
<i>fühlen, v.</i> 感スル。觸レル	<i>fühlen, v.</i> 感ス。觸ル。
	<i>Fühler, m.</i> 接觸兵。
<i>Führung, f.</i> 接觸。接肘。連絡	<i>Führung, f.</i> 接觸。接肘。
—— <i>nehmen</i> 接肘スル	—— <i>nehmen.</i> 接肘ス。
<i>enge</i> —— 密着接肘	<i>enge</i> —— 密着接肘。
<i>leichte</i> —— 輕疎接觸	<i>leichte</i> —— 輕疎接觸。
	<i>die Klingen haben</i> —— 鋒刃相觸ル (擊劔ノ)
<i>mit dem Feinde</i> —— <i>halten</i> 敵軍トノ接觸ヲ維持スル	<i>mit dem Feinde</i> —— <i>halten</i> 敵トノ接觸ヲ維持ス。

mit dem Feinde — nehmen 敵軍トノ接觸ヲ取ル	mit dem Feinde — nehmen 敵トノ 接觸ヲ取ル。
führen, v. 嚮導スル。指揮スル	führen, v. 嚮導ス。指揮ス。
	das Kommando —. 司令タリ。司令權ヲ行使ス。
	Krieg —. 交戦ス。戦争ヲ爲ス。
	den Oberbefehl —. 統帥ス。司令權ヲ有ス。
Führer, m. 長。指揮官。嚮導者。案内者。運轉手（機關車ノ）	Führer, m. 嚮導者。案内者。長。指揮官。運轉手（機關車ノ）。
Fuhrkosten, pl. 運賃	Fuhrkosten, pl. 運賃。
Fuhrmann, m. 運送人。馭者。車夫	Fuhrmann, m. 運送人。馭者。車夫。
Fuhrpark, m. 彈藥及糧食運搬ノ車輛縦列。葛秣車輛縦列	Fuhrpark, m. 車輛縦列。
Fuhrparkskolonne, f. 同上	Fuhrparkskolonne, f. 同上。補助縦列。
Führung, f. 指揮。裝填。誘導（馬術語）	Führung, f. 指揮。裝填。誘導（馬術語）。行狀。
gute — 善行。行狀方正	gute — 善行。行狀方正。
schlechte — 行狀不正	schlechte — 行狀不正。
Führungsattest, n. 善行證書	Führungsattest, n. 善行證書。
Führungswarzen, pl. 彈筈	Führungswarzen, pl. 彈筈。

参考のため、先に 12 頁で述べた司馬亨太郎の訳語について、偕行社版、藤山・高田書、兵藤書の三書の訳語を並べてみよう。次頁で（ ）の訳語は独立の見出しがなく、用例の訳語によるものである。

	司馬訳	偕行社版	藤山・高田書	兵藤書
Abmarsch	轉進	開進。出發	出發。方向變換行進 退却	出發。方向變換行進。 退却。
Anlehnung	依托	(倚托)	倚托。銜受 <sup>ハミウケ</sup>	倚托。銜受(ハミウケ)。
Anmarsch	接進	(進軍)	進軍。進ミ近ツク事	進軍。進ミ近ツク事。
Aufmarsch	閉進。開進 集中	開進。排開	開進。排開。集合	開進。排開。集合。
Rückmarsch	背進	退軍。退歩	退軍。退歩。背進	退軍。背進。退却。
Schlüsselpunkt	鎖鑰點	鎖點	鎖鑰點	鎖鑰點。
Schwengung	施回	旋回	旋回	旋回。
Vormarsch	前進	前進	前進	前進。

このように兵藤書の訳語は藤山・高田書の訳語と殆ど変わらないことがわかる。因みに司馬亨太郎が高田善次郎と共編の『和獨兵語字彙』(精華書院 明治43年)では、次のようになっている。

**Kaishin**, 開進, Aufmarsch *m*

**Shuppatsu**, 出發, Abmarsch, Aufbruch, Marschantritt *m*.

**Taikyaku**, 退却, Abzug, Rückzug, Rückmarsch, Abmarsch *m*.

**Zenshin**, 前進, Vormarsch, Anmarsch *m*, Vorgehen, Vorrücken *n*, Vorbewegung *f*

閉進は見出しにない。

( ) を用いての註釈の他に見出し語に関連して以下の表が載せてある。

関連見出し語		掲載頁
Fuss	各國呎表	210~211
Intendant	獨國經理官	276~277
Marineoffizier	獨墺兩國海軍將校ノ階級	356~357
Maass	メートル外度量衡表	362~364

Meile	各國哩表	368~371
Offizier	獨墺兩國陸軍將校ノ階級	402~403
Rossarzt	普國及(巴威里國 <sup>17)</sup> )陸軍獸醫ノ階級	465
Unteroffizier	獨國陸軍下士ノ階級	581

また、表にはなっていないが、406~409頁にわたって「獨墺數國ノ勲章左ノ如シ」として、普國、巴威里國、瓦敦堡國<sup>18)</sup>、索遜國<sup>19)</sup>、墺匈國<sup>20)</sup>の勲章名が列挙されている(図9)。

注

17) ババリア、即ちバイエルン王国。1871年統一なったといっても、「第二ドイツ帝国」は22の君主国と3つの自由市の25国から成る連邦国家であった。各領邦は統一後も王国あるいは自由市として存立し続け、第一次世界大戦後の1918年それぞれワイマル共和国の一州となった。

18) ヴュルテンブルク王国

19) ザクセン王国

20) オーストリア=ハンガリー二重帝国

3

奥付には以下のように記載されている(図10)。

明治四十二年十一月十九日印刷

明治四十二年十一月二十二日發行

定價金貳圓五拾錢

最新獨和兵語字典奥附

不復讎

許製刻

著者 兵藤三郎





東京市麴町區下二番町七十番地

發行者 伊 藤 芳 松

東京市赤坂區表町二丁目一番地

印刷者 青 木 弘

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發 行 所

東京市赤坂區表町二丁目一番地

兵 事 雜 誌 社

電話新橋四二〇二番 電信略符「ヘイ」

印刷の日付は十一日、発行のそれは十五日と印刷されてあるのが、手書きでそれぞれ十九、二十二と上書き訂正してある。その理由はわからない。

奥付に定価の下に「最新獨和兵語字典奥附」と記してある。ここでも「字典」と「辭典」の漢字の使い分けが当時は気にされなかった例が見られる。(注3)参照)

『兵事雜誌 THE HEIZI ZASSHI』は国民挙げての軍国化に奉仕すべく、兵事知識の普及を目的として、軍人だけでなく一般人向けとしても明治29年6月から発行された雑誌で、その第一號卷頭の「言志」には本誌発行の目的を「將校以外の將校を養成し、兵士以外の兵士を薰陶し以て海陸軍隊の後勁を爲らん」と謳っている。諸外国の兵法理論の紹介から陸軍士官学校の入試問題に至るまであらゆる軍事に関する論文・記事を載せたが、軍事に関する論文の執筆者の多くは匿名あるいはペンネームを使用している。その第四号に掲載している「都新聞評」に「発行の即日既に五千部の印刷総高を売切り直に再版を爲すに至れり」とあるのは、多少の誇張があ



るとは思うが、雑誌はほぼ毎月2回発行され、国会図書館には大正2年12月15日発行の第17巻第24号まで、途中欠号は多々あるが、収蔵されている。その第17巻第24号所載の「兵事雜誌社出版略目」には軍事関係の書109点がリストされている。なお創刊号の奥付では、発行兼編輯人伊藤芳松と発行所兵事雜誌社の住所は「東京市赤坂區丹後町二十六番地」となっていて、本辭書の奥付記載の住所と異なっている。また雑誌の印刷人は「東京市京橋區新肴町十四番地 高嶋幸次郎」となっていた。

『兵事雜誌 第十三年第十九號』（明治42年10月5日発行）の折り込み広告に『最新獨和兵語辭書』の予告が載っている（図11）。この広告によれば体裁は四六版四十八斷ち。用字獨文五號和文六號。表製本裝本金文字入。頁數約七百餘頁で、正價金二圓五十錢のところ來る廿日迄の豫約申込者に對しては金二圓とし、期限後は正價に復す、としている。内容紹介文は次の通りである。

夫れ字書は學海<sup>しんぱつ</sup>の津筏、闇夜の燈明なり兵學に志す者兵語字書を備へずんば大著作名に向ふも徒に隔靴搔痒<sup>かつかさうよう</sup>の嘆をなすに終らんのみ、本社こゝに見る所あり斯學<sup>らんそう</sup>の瀾叢たる獨逸兵書の研究者に便せん爲め特に前陸軍編修兵藤氏に請ひて先年來本字書の發行を計畫せり著者は十有餘年間參謀本部に在りて洽<sup>あまね</sup>く古今東西の兵書を涉獵し博大の知識と多年の經驗とを以て豊富なる最新諸書を參考とし五年有餘の歳月を費し今や豫想以上の成績を以て本書の編纂を了せられたり之を在來の獨和兵語字書に比するに語數に於て實に十の六七を増加し其語數約二萬に近からんとす且つ所々に詳註を施し數多の應用例を示し精密なる諸表を挿入し以て繙閱者の便に供せり故に一本を懷にして獨逸兵書に臨めば利刃を揮つて亂麻を斷つが如く細大の疑問手に隨て解くべし。陸軍大將子爵寺内閣下陸軍中將東條閣下並に陸軍少將大島閣下は本書の大成を賞せられ特に題字及序文を寄與せられたるを見ても本書の凡な

らざるを知るに足らん、希くは進取に鋭意なる軍人諸彦速<sup>しよげん</sup>に購讀の榮  
を賜はらんことを

(振り仮名は筆者)

発売後の『兵事雑誌 第十四年第一號』(明治43年1月)には、次の広告(図12)が掲載された。活字の組み方は変えているが、文面は上に紹介した予約の文面と同文である。そうしてこの広告は、寺内の肩書きが子爵から伯爵に変更されて、当分の間継続して掲載されている。

辞書の発刊後3年を経た大正元年8月20日発行の『兵事雑誌』第16年第16号の折込み頁に、著者を同じくする近刊の『最新獨和兵語辞典』の豫約募集と並んで、『最新獨和兵語辞典』の増補第二版の広告が掲載された(図13)。第二版を紹介するその文面は「夫れ字書は學海の津筏、闇夜の燈明なり」から「本書を懐にして獨書に臨めば利刃を揮つて亂麻を斷つが如く細大の疑問手に随つて解くべし」までは上述の初版予約及び発売後の広告の文面と殆ど同文で、それに続いて「宜なる哉本書の世に公表さる、や忽ち篤學者界の大好評を博し第一版を賣り盡せしに付き今回更に大增補を乞ひ第二版を出版するに至りしものなれば獨和兵語辞書にして本書の右に出づるものなきは本社の信じて讀者に推舉する處なり」と結んでいる。そして中央に(追補内容見本)としてBAL—BATの[4]頁が掲げられ、それには **Ballonausrüstung** 氣球裝備 から **Batteriestellung** 砲兵陣地 までの30語が載っている(初版の本文では **Ballon** 氣球から **Batteriestand** 砲坐 までの見出し語は109ある)。しかしこの広告によると、「頁數六百餘頁毎頁三十二行」は第一版と変わりなく(初版は予約広告では頁數約七百餘頁、実物本文は644頁)、本文に手を加えることなく、巻末に若干頁を追加して新語を補足したものであろう。正價金二圓五十錢も変わっていない。因みにこの広告は第16年第20号まで毎号載っている。





## あとがき

本稿の作成に当たり、『獨佛和兵語字叢』を貸与してくださった横浜国立大学名誉教授西堀 昭氏の他、滋賀大学教授藤田保幸氏と元成城学園高等学校教諭工藤信彦氏に多大の教えと有益な助言を仰いだ。三氏のご好意に対しここにあらためて深く感謝の意を表します。